海外での谷崎研究

——ブダペスト会議報告をかねて

西原大輔
（にしはら・だいすけ）

昨一九九七年八月、ハンガリーのブダペストで、ヨーロッパ日本研究協会（ＥＡＪＳ）の大会が開催された。四日間に及んだ大会最終日の八月三十日には、谷崎潤一郎を主題とするパネルが組まれた。海外における谷崎研究の動向を紹介しつつ、この谷崎パネルについて報告したい。

谷崎潤一郎の作品は、海外でとりわけ評判が高い。日本で大作家と言えば、森鷗外や夏目漱石などをまず思い浮かべるのだろうが、英語圏では谷崎の方が寧ろ先に来ると言っても過言ではない。読書界での知名度の高さ、翻訳の豊富さでは、鷗外・漱石などは足元にも及ばないのである。戦後のアメリカでは、エドワード・サイデンステッカー、ドナルド・キーン、エドウィン・ライシャワーといった、数々の優れた日本研究者が生まれた。これは戦後の日本にとって非常に幸福なことだったと思う。少数派の域を脱することのできないヨーロッパの日本研究と比べても、北米のそれは、層の厚みが違っている。おかげで日本研究は北米で市民権を得て、一大産業になったと言ってもよいだろう。

海外での谷崎の紹介・研究も、北米が主導権を握って来た。第二次大戦後は、日本文学を愛する一流の研究者によって、読みごたえのある英訳が次々と誕生している。サイデンステッカー氏の *Some Prefer Nettles*（『蓼喰ふ虫』）や *The Makioka Sisters*（『細雪』）、そして、アンソニー・チェンバース氏の *Naomi*（『痴人の愛』）、ハワード・ヒベット氏による *The Key*（『鍵』）や *Diary of a Mad Old Man*（『瘋癲老人日記』）、ポール・マッカーシー氏の *Childhood Years : a Memoir*（『幼少時代』）、*A cat, Man, and Two Women*（『猫と庄造と二人のをんな』）などである。これらの日本文学研究者の努力によって、谷崎は最も英訳の整備された日本人作家の一人となった。

昭和三十年代に一つのピークを経験した谷崎研究だが、その後も研究・翻訳共に盛んである。最近十年間ほどの研究の主な動向について述べて見たい。まず特筆すべきは、一九九五年四月五日から八日にかけて、ヴェネチアで開催された谷崎潤一郎国際シンポジウムであろう。これは、谷崎のイタリア語への翻訳で知られるヴェネチア大学のアドリアーナ・ボスカロ教授が中心になって開かれた国際学会であり、西洋の谷崎研究者が一同に会した観がある。その成果は、日本語版学会論文集『谷崎

潤一郎国際シンポジウム』(中央公論社、一九九七)として出版されている。またシンポジウムの報告として、『中央公論』一九九五年七月号に、ポール・マッカーシー「美と幻想：ヴェネツィア谷崎研究学会からのレポート」がある。

論文集の内容は多岐に及ぶ。執筆者も、既に評価の定まった学者から新進の研究者まで幅広い。収録されている二十二編の文章の視点は多様だが、ひとつの顕著な特徴は、舞台芸術や映画との関係から谷崎を論じようという傾向である。大正期前後の演劇黄金時代にあって、谷崎は多くの戯曲を残し、また活動写真の可能性にいち早く目をつけた。谷崎の戯曲を取り上げたドナルド・キーン氏、新歌舞伎を扱ったジャン＝ジャック・チュディン氏、純映画劇運動に注目したジョアン・バーナーディ氏、谷崎作品の映画化を論じたドナルド・リチー氏などがこの傾向を代表している。

第二の特徴は、谷崎の「言説」の問い直しである。耽美派は、実際の社会や政治から文学を切り離そうとするものだが、これをもう一度現実とのつながりの中で考えようとする方向である。『細雪』を政治小説として読もうとするアンソニー・チェンバース氏、谷崎作品に描かれている他者としての「西洋」は、主観的に構築されたものに過ぎないと言うポール・マッカーシー氏、「異端者の悲しみ」の「はしがき」を取り上げ、文壇と国家という二つの権力に対するレトリックを緻密に分析したケン・イトー氏などが挙げられる。

これまで谷崎の作品が西洋の読者にアピールしてきた理由の一つは、谷崎が日本の伝統文化を扱っていたからであった。その作品は、西洋人の日本に対する憧憬や異国趣味を満足させてきた。また、耽美的・頽廃的オリエントという西洋の伝統的東洋像の延長として、日本のエロティシズムがすんなりと理解されたという面もあると思う。小説に登場する日本の伝統文化や、大胆な性欲の描写が「オリエント」としての日本のイメージをかきたて、これが西洋人読者にとっての一つの魅力となってきた。しかし、『谷崎潤一郎国際シンポジウム』「はじめに」でドナルド・キーン氏が言うように、谷崎作品の魅力は異国趣味の要素だけではない。九〇年代に入ってくると、従来のようなエロティシズムや日本趣味の視点とは異なったアプローチを試みる傾向が現れている。

単著として出版されている近年の谷崎研究では、Ken K. Ito, *Visions of Desire : Tanizaki's Fictional Worlds* (Stanford : Stanford University Press, 1991) 及び Anthony Hood Chambers, *The Secret Window : Ideal Worlds in Tanizaki's Fiction* (Cambridge : Harvard University Press, 1994) の二冊が注目される。ケン・イトーの *Visions of Desire* は、非常に斬新な谷崎論だと言えよう。特に第二章「The "Orient" and the "West"」や、第三章「The West Remade」は、近代日本文学におけるオリエンタリズム・オクシデンタリズムの問題にかかわる議論であり、日本人による「日本」や「西洋」の表象を論じるにあたって、一つの基準を作り出したと言ってもよい。西洋人が「日本的」だと考えているものは、実はある歴史の過程の中で作り出されたものに過ぎない。これと同様に、日本文学の作品に登場する「西洋」なるものも、オリエンタリズムの裏返しに過ぎず、一面的で偏った言説に満ちている。小説の中の「西洋」なるものが、実際の西洋とは離れた、

構築された虚構のイメージであるという点について、イトー氏は荷風と谷崎の作品に即しつつ見事に論じており、非常に価値ある論考である。また Anthony Hood Chambers, *The Secret Window : Ideal Worlds in Tanizaki's Fiction* は、七篇の谷崎作品を取り上げ、作家の理想世界を論じた手堅い研究書である。

英語圏以外についても、少し触れておきたい。フランスでは、ガリマール社プレイアッド叢書に谷崎潤一郎選集のプロジェクトがある。また『谷崎潤一郎国際シンポジウム』「序文」によれば、西洋における谷崎研究の書誌をまとめた "Tanizaki in Western Languages" なる本が刊行される予定であるという。西洋での谷崎の翻訳や研究の全貌が明らかになるのも、もうじきだろうと思う。アジアに目を転じると、西洋での人気ぶりとは対照的に、谷崎の研究は少ない。韓国では、高麗大学校の金春美教授による入門書『(文学の理解と鑑賞九十二) 谷崎潤一郎』(建国大学出版部、一九九七) がある。金春美氏のご教示によれば、耽美派の文学は、永井荷風なども含めて研究は活発でなく、漱石・芥川・志賀といった小説家が好まれているという。知識人作家やリアリズム作家が韓国の文学風土に受け入れられやすいということだろう。一方中国では、谷崎作品の翻訳は早くも一九二〇年代末から上海で行われ始め、戦後の台湾や大陸でも訳本は出ている。『中國譯日本書綜合目録』(中文大学出版社、一九八〇) や年次ごとの『中国書籍総目録』にも翻訳書が散見されるのだが、大きな反響があったとは考えにくい。

最後に、一九九七年八月にブダペストで開かれた、第八回ヨーロッパ日本研究協会国際会議における、谷崎のパネルについて紹介したい。ヨーロッパ日本研究協会、略して、EAJS (European Association for Japanese Studies) という学会は、欧州を中心に世界四十二カ国、個人会員数七百人強の参加がある日本研究の学会である。政治・社会・経済・歴史・思想・文学・言語など、日本に関するさまざまな分野の研究者が参加している。その三年に一度開催される国際会議の第八回大会が、一九九七年八月二十七日から三十日まで、ハンガリーの首都ブダペストで開催された。大会には、ジャパン・ファウンデーションを始め、多くの日系財団・企業が資金を提供しており、会場や交通・印刷物など、周到な準備が行われていた。また大江健三郎氏や、日本文学のマジャール語訳を出版した経験もあるアールパード・グンツ大統領のスピーチがあったため、広くメディアの関心も集めたようだ。EAJSはヨーロッパで組織されている学会だが、日本人の加入も歓迎しており、国際会議にしては珍しく日本語での発表が可能である。

最終日の八月三十日には、谷崎潤一郎をテーマとしたパネルが設定された。ポール・マッカーシー教授 (駿河台大学) の司会のもと、千葉俊二教授 (早稲田大学)、わたくし西原大輔 (駿河台大学) 及びアンソニー・リーマン教授 (トロント大学) の順番で、発表・討論を行った。

「『刺青』の美学」と題された千葉氏の発表では、「二重映し」という視点から、「刺青」の分析が行われた。谷崎の関心事は、二重映しの世界をほんとうらしく語る点にあるという。「刺青」においても、実際の入れ墨の作業ではありえない事がもっともらしく書かれている。千葉氏の指摘によれば、一晩で背中一面に刺青をほどこすとか、色上げをよくするために湯につけるといったことは、非現実的であるという。さらに、江戸時代の刺青師の家に内風呂があったり、大きな鏡台があったりと、歴史的に不自然な描写もある。また、江戸の物語たる「刺青」に、ピラミッドが比喩として出ている。これについて千葉氏は、ケ

ン・イトーの研究を引用しつつ、フランス文学に見られるオリエントへのエキゾチシズムが、永井荷風経由で反映したものであり、オリエントに対するあこがれが江戸下町と二重映しになっているのだと指摘した。

次いで西原は「Tanizaki Jun'ichiro's Discourse on China（谷崎潤一郎の中国に関する言説）」という題で発表を行った。谷崎はいわゆる「支那趣味」を流行させた作家であり、一九一八年の中国旅行を契機に「天鵞絨の夢」「秦淮の夜」「鶴唳」「朝鮮雑観」等を執筆した。これらの作品には、中国・朝鮮を、不可思議な物語の舞台にふさわしい、近代世界と無関係な、古代さながらの国として表象する、オリエンタリズム的言説が見られる。しかし一九二六年の第二回中国旅行で、田漢・郭沫若ら中国の知識人と対話を行うことにより、谷崎は植民地化に苦しむ中国社会の現実に気づき、オリエンタリズム的中国観は覆された。以後彼は「支那趣味」の作品を全く書かなくなり、専ら母国日本をオリエント的に表象する方向に向かったと論じた。

最後の、リーマン氏の発表題目は、「Scripting the Role : Woman as Stage Text in Tanizaki's *Diary of a Mad Old Man*（脚本作り：谷崎の『瘋癲老人日記』における舞台テクストとしての女性）」であった。リーマン氏は、『瘋癲老人日記』を歌舞伎の美学という点から解明しようとする。『瘋癲老人日記』の冒頭は歌舞伎談義から始まるが、これは作品全体の主題と密接にかかわっている。「恩讐の彼方へ」「彦市ばなし」「助六曲輪菊」といった演目名も、実は主人公の心情と深く関連しており、大切な役割を果たしているのだという。そして、健康上の理由から芝居見物もままならない老人は、心の中の舞台で嫁の颯子を花魁に仕立てあげ、自宅で歌舞伎を演じようとしていると主張する。老人と颯子は、芝居を演じる役者であり、他の家族はその観客のように描かれているとし、具体的に作品を分析した。

今回ブダペスト会議に参加して感じたのは、日本人による谷崎研究と、非日本人による谷崎研究が、ますます相互に刺激しあっているということである。西洋での谷崎研究は、いわゆるジャパノロジーからジャパニーズ・スタディーズへと変貌し、一方日本側も、国民文学の研究たる国文学から、世界に開かれた日本文学の研究へと向かっている。ＥＡＪＳのような欧州の学会にも、日本人がうろうろしている状況であれば、西洋の日本研究者も、良かれ悪しかれ日本人読者を意識せざるを得ない。また日本人による谷崎研究も、西洋での谷崎研究の動向を無視できない。谷崎研究において、内外の研究者の緊密な協力と相互の刺激が進んで行くことだろう。

――駿河台大学専任講師・比較文学――